

[翻 訳]

イザナギ・イザナミ：創世結婚の文化学的意義

——私の『古事記』解説

巖 紹 壘^① 著
丹 羽 香 訳

〈目 次〉

はじめに

- 1 文化コンテキストと文学の発生的研究
 - 2 イザナギ・イザナミ創世結婚神話の文化元素と
その文化学的意義
 - 3 文化学的意義A：古代日本の哲学的信仰
 - 4 文化学的意義B：人類文明との共通の認知
 - 5 文化学的意義C：異質の文化に対する融合力と変異
- まとめ

はじめに

この度は、栄えある「山片蟠桃賞」^②を頂戴いたしまして、たいへん光栄に存じます。中西進先生^③、審査委員会の先生方、私の学術をご評価くださりまして、ありがとうございます。大阪府の皆さんにも、心から感謝申し上げます。

私はこれを、いわば神聖に、そして厳粛に受けとめたいと思っております。中国の学者が今まさに、積極的に、グローバルな日本文化研究に邁進している時、世界各国、数多くの優れた先生がいらっしゃる中で、この受賞^④は、日中両国の互いの文化理解に更なる一歩が踏み進められた証と考えます。

本日は、僭越ながら、この場をお借りしまして、日本古代文化における最古の作品『古事記』におけるイザナギとイザナミの二神創世神話の解説について、私の基本的な考え方とその方法をお話し、皆様のご意見やご指導を賜りたいと存じます。

1 文化コンテキストと文学の発生的研究

『古事記』は日本民族文化が記された文献の源で、そこに描かれた神話が持つ神秘性、系統性、生命力、そしてその豊かな内容には、世界文学の中でも独特なものがあります。『古事記』については、日本の先生方がすでに多くの研究成果をあげていらっしゃいますが、私はここで文化学的立場から、イザナギとイザナミの創世結婚における文化学的意義について、私なりの考えをお話したいと思います。

ご存知のとおり、文学の研究にはいろいろな方法があります。例えば、「文学史」という方法、「解釈学」という方法、「符号学」という方法などです。どれもとても興味深いものだと思います。そして、それらの研究方法の違いは、それぞれの研究者の文学に対する異なる理解の表れだと思います。もち

ろん、それぞれの研究結果も違ってきます。私は、「文化コンテキスト」という概念を基に、「文学の発生学」という考え方と方法から、文学のテキストを解説することを主張してきました。文化学的立場に立って文学のテキストを解説するというのは、文学テキストが形成された特定の文化コンテキストに着目して、テキスト中のストーリーやプロット、また登場人物の、文化もしくは文化史から見た真の意義を考え、そして、テキストに存在する様々な想像や隠喩、虚構やシンボルの意味と意義を説明するというものです。これらの要素が神話のイメージを形成していると思うからです。文学テキストの文化学的解釈は、文学の発生学的研究における一つの重要なジャンルだと思っています。このようなロジックに基づいて、『古事記』を発生学という面から考えてみることは、私にとって非常に興味深いことであったのです。^⑤

2 イザナギ・イザナミ創世結婚神話の文化元素とその文化学的意義

『古事記』神話の世界は、現在私が知っている限りにおいて、世界中の各種各様の神話の中でも最も具体的な体系を持っています。その体系については、この神話に記された天地創造の様子と、創造の形態に関する種々の問題に着目すべきだと思います。

以下は、高天の原から大八島国に至る『古事記』冒頭の部分です。

天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。……独神と成り坐して、身を隠したまひき。

次に成れる神の名は、宇比地邇神、次に妹須比智邇神。次に角杵神、次に妹活杵神。次に意富斗能地神、次に妹大斗乃弁神。次に於母陀流神、次に妹阿夜訶志古泥神。次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神。

是に天つ神諸の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、……其の島に天

降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。……爾に伊邪那岐命詔りたまひしく、「然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて、美斗能麻具波比為む。」とのりたまひき。如此期りて、乃ち「汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむ。」と詔りたまひ、約り竟へて廻る時、伊邪那美命、先に「阿那邇夜志愛袁登古袁。」と言ひ、後に伊邪那岐命言、「阿那邇夜志愛袁登壳袁。」と言ひ、各言ひ竟へし後、其の妹に告曰げたまひしく、「女人先に言へるは良からず。」とつげたまひき。然れども久美度邇興して生める子は、水蛭子。……

是に二柱の神、議りて云ひけらく、「今吾が生める子良からず。猶天つ神の御所に白すべし」といひて、即ち共に参上りて、天つ神の命を請ひき。爾に天つ神の命以ちて、布斗麻邇爾ト相ひて、詔りたまひしく、「女先に言へるに因りて良からず。亦還り降りて改め言へ。」とのりたまひき。故爾に反り降りて、更に其の天の御柱を先の如く往き廻りき。是に伊邪那岐命、先に「阿那邇夜志愛袁登壳袁。」と言ひ、後に妹伊邪那美命、「阿那邇夜志愛袁登古袁。」と言ひき。如比言竟へて御合して、生める子は、淡道之穗之狭別島。次に伊予二名島を生みき。此の島は、身一つにして面四つ有り。故、伊予国は愛比壳と謂ひ、讃岐国は飯依比古と謂ひ、粟国は大宜都比壳と謂ひ、土左国は建依別と謂ふ。……故、此の八島を先に生めるに因りて、大八島国と謂ふ。^⑥

これは、天つ神イザナギとイザナミの結婚の物語ですが、同時に、日本の国土形成の物語でもあります。私はここに、『古事記』の備え持つ六つの重要な文化元素が読めると思います。

まず、第1の元素は「高天の原」で、高天の原は神話の表す宇宙における唯一の場所です。

次に、第2の元素は、天之御中主の神を始めとする「天つ神」です。彼らは宇宙における唯一の生命体で、天つ神の活動は宇宙の生命力の表現だといえるでしょう。

第3の元素は、天つ神であるイザナギとイザナミが大地に降り立った後、その仕事の手始めとして、大地に立てる「天の御柱」です。天の御柱は結婚式の唯一の道具です。このプロットでは、イザナギとイザナミが無性の神から有性の神、男性の神と女性の神に変化し、兄と妹になっていることに注意しなければなりません。

第4の元素は、イザナギとイザナミの結婚に関する最初の儀式、即ち、「天の御柱を廻る」という儀式です。着目すべきは、この二人の神が廻る方向です。女の神イザナミが右から左へ廻り、男の神イザナギが左から右へ廻り、そして、巡り会ったところで結婚に至ることです。

第5の元素として、イザナギとイザナミの結婚に関する二番目の儀式を挙げることができます。即ち、「恋の歌」と「水蛭子」です。イザナミが、先に「阿那邇夜志愛袁登古袁あなにやしえをとこを（まあ、なんてステキな男の人でしょう）」と言い、その後からイザナギが「阿那邇夜志愛袁登売袁あなにやしえをとめを（ああ、なんてステキな女の人だろう）」と言って交わると、「ヒルコ」が生まれました。その子は葦船に入れて流してしまいます。天つ神に教えを請うと、「女先に言へるに因りて良からず。亦還り降りて改め言へ」と言われます。帰って、今度は、男の神が先に言い、女の神が後から言うと、正常な分娩となりました。

最後は、第6の元素「大八島国」の創造です。即ち、日本の国土の登場です。

以上、六つの文化元素が、イザナギとイザナミ二神の結婚による万物創造の物語を構成していると思います。まさに精彩豊かな、また豊かな神話です。

では、この「結婚神話」には、いったいどのような文化学的意義が含まれているのでしょうか。これを、初期の稲作文化における豊穰を祈る「儀式」と解釈している研究者もいますし、また、近親結婚の弊害を除くための「呪術」と解釈している研究者もいます。それぞれどの解釈も皆とても興味深いと思いますが、私としては、先ほど申し上げた六つの元素から見て、この創世結婚の神話は、日本神話の発生的問題と密接な関係があると思っています。

『古事記』のこれら六つの文化元素には、日本神話の、しいては日本文化の、三点の重要な文化学的意義を読み取ることができます。ここではそれを、仮に A、B、C としてご説明いたします。

A は第 1 と第 2、そして第 6 の元素から読み取れる、日本民族の「古い哲学的信仰」です。B は、第 3 の元素から知られる、日本民族の「人類文明との共通の認知」です。C は、第 4 と第 5 の元素から窺われる、日本民族の「異質の文化（即ち、外来文化）の材料を吸収し、融合することに対する絶大な能力」です。

3 文化学的意義 A：古代日本の哲学的信仰

言うまでもなく、神と神の活動は、世界中の各民族の神話における中核です。そして、神の活動の核心は、世界の創造です。私は、あらゆる神話に描かれた人類その他万物創造の部分は、その神話の核であると考えています。そこには、各々の民族の最も古い宇宙観や人生観、美意識などが表れていて、それは各民族の最も古い哲学的信仰、哲学的認識です。

世界中の各民族の自然環境や社会的、文化的環境は異なります。だから、各民族の創世神話は皆、それぞれ独自の民族の特徴を備えているわけです。ここで、『古事記』の創世神話に見られる文化的意義について、中国神話とギリシャ神話、そして、エジプト神話との比較をしてみます。そうすると、この哲学的信仰の文化基層の違いがよく分かるでしょう。どの民族の、どの神話もとても豊かな、詩情あふれる内容なのですが、私はここで、やはり万物創造の段を取り上げます。

日本神話の宇宙観

イザナギとイザナミの結婚神話に読める第 1 元素は「高天の原」でした。高天の原は神話が展開する唯一の世界であり、宇宙です。結婚神話の第 2 元素である「天つ神」は、その宇宙における唯一の生命体です。高天の原と天

つ神は、いわば宇宙共同体を構成しているわけです。宇宙には、この共同体の他に、いかなる物質も、いかなる存在もありません。——たとえば、海も、大地も、山も、太陽も、月もありません。神話の、このような宇宙観は「天と神の共同体宇宙」といえるでしょう。

中国神話の宇宙観

中国神話の宇宙観は、日本神話のそれと異なります。中国の古代には、『古事記』や『日本書紀』のような系統立った神話は残されていません。中国の神話は様々な文献の中に散在しています。

中国神話では、「女媧」が複数の民族に共通する創造神です。女媧の神話は二つの系統に分けることができますが、一つは一人神の神話です。面白いのは、この神は「女媧」とはいつでも女性ではなく、また男性でもなく、無性の神なのです。

漢族の神話を見てみましょう。ある日、女媧は泥で人間を作り始めますが、あまり作り過ぎて疲れてしまいます。そこで、一本の枯れた蔓を手にとり、泥遊びを始めました。そして、その蔓から滴ったドロドロの泥を地面に落とすと、一滴一滴の泥が人に変わり、多くの漢族の祖先が生まれました。

ここから言えることは、まず、女媧は泥で人を創り、泥は人を創る材料で、人と泥は密接な関係にあるということです。次に、女媧は人を大地、つまり地上で創りました。大地は宇宙に固有の本体です。三番目に、女媧が創ったのは人で、神ではないということです。漢族の最も古い、宇宙に関する認知は大地にあったことが分かります。これは、高天の原という宇宙観とは大いに異なります。

ギリシャ神話の宇宙観

ギリシャ神話は中国神話同様、その保存は分散型で、様々な文学作品に散在しています。例えば、著名な詩人ホメロスの叙事詩『イーリアス』『オデュッセイア』などに詠まれています。また、古代ギリシャの悲劇はそのほとんど

が神話をモチーフとしています。有名な詩人アイスキュロスの、最も代表的な作品『縛られたプロメテウス』もそうです。

プロメテウスは、ギリシャ神話の中でも最も早く登場する創造の神です。木の葉と泥で人を作り、そして、天の火を与えました。しかしそのために、コーカサス山脈の頂上に縛りつけられて、日々鷹に肉を啄ばれます。

さて、プロメテウスは、木の葉と泥で人を創りました。これは、古代ギリシャ人の宇宙観が大地を中心としている証拠です。このような「大地宇宙観」が、ギリシャ神話の中でも最もよく知られるオリンピアという聖地に、ゼウスとヘラの神話を生むのです。

エジプト神話の宇宙観

エジプト神話に最初に登場する創造の神はラーです。ラーは蓮の花の神で、蓮の花から生まれました。この神が生まれると、大地は明るく輝きますが、ある日、ラーが何かのことで泣いて、多くの涙を流します。すると、その涙が人になりました。エジプト神話の創造の神は間違いなく、大地に咲く蓮の花の変化です。

以上、日本の神話と、中国、ギリシャ、そしてエジプトの創世神話について、簡略な比較をしてみました。もちろん、この三つの民族が全世界の代表であるというわけではありませんが、その歴史の古さからいって、代表的存在としての価値は認めていいのではないのでしょうか。

このように比較してみると、日本神話の宇宙観には、哲学的信仰（哲学的認識）において、最も基本的な特徴があるといえます。他の民族が、宇宙の存在についてイメージしたものと、日本民族のそれとは完全に異なります。

Aの文化学的意義については、さらに、もう一つの元素について考えなければなりません。それは、さきほど申し上げた第6の元素です。

イザナギとイザナミが契りを結んだ、正常な分娩の結果が、「八島」の出

産でした。大八島国は日本の国土ですが、中国やギリシャ、そしてエジプトの三つの民族の観念とは違って、生命体です。つまり、宇宙を構成する土地、即ち「大地」ではなく、二神の結婚の結果、生まれた「神の後裔」です。これは、中国やギリシャ、そしてエジプトの神話に出てくる大地ではありません。中国やギリシャ、エジプトの神話の大地に生命はなく、自然の物質です。八島は「自然に存在する物質」ではなく、「命ある存在」です。「神様」「ご神体」なのです。

このように、「高天の原」と「天つ神」と「大八島国」は、完全な「神なる宇宙共同体」を構成し、日本神話における最も基本的な哲学的基礎を成しているのです。このような特徴は、日本民族の祖先の精神世界の、最も深層にある認識の表現です。宇宙の起源と宇宙の活動に関する、このような基本的観念は即ち、神に対する絶対的崇拝の表れであり、それが神話の形を取って、生き生きとした物語に変えられているといつてよいでしょう。

まさにこの意味において、日本神話は、世界の主要な神話に比して、その哲学的信仰に独特なものがあるといつてよく、その独特さの特徴は、神に対する絶対的な信仰に民族の哲学的基礎を置くということにあるといえます。

4 文化学的意義B：人類文明との共通の認知

Bは、第3の文化元素「天の御柱」に読める、日本民族の「人類文明の進化の過程における共通の認知」についてです。

Aの文化学的意義の分析に当たって、古事記の二神の創世結婚神話に民族の特徴があるとお話しましたが、かといって、日本神話が世界文明とかけ離れた独立した存在、「孤児」であるというわけではありません。日本文明史もやはり世界文明の一員です。このB点から、日本神話が世界文明の構成員であり、文明の進化の過程において、世界の文明と共通した認知をしていたことが確認できます。

第3の文化元素は、イザナギとイザナミの二人の神が大地に降臨し、「天の御柱」を立てるというものでした。この「天の御柱」は、イザナギとイザナミが結婚を行なう上で最も重要な、しかも唯一の道具です。

この「天の御柱」の文化的意義について、ある研究者はこれを「宇宙の真ん中の軸」だと言い、ある研究者はこれを「世界の中軸線」であると言い、また、ある研究者はこれを「宇宙の木」だと言っています。本日、ここにご在席の中西進先生は、『天降った神々』^⑦でこれを「生命の木」と呼んでいらっしゃいます。いずれも皆、非常に興味深い見解です。しかし、「宇宙の真ん中の軸」「世界の中軸線」「宇宙の木」というのは、少し抽象的な概念かもしれません。私は、中西先生の「生命の木」は、『古事記』研究史に大きな啓示を与えるものであったと考えています。「天の御柱」という形象に込められた真の文化学的意義が、このような解説によってやっと理解できるようになったと思います。

長野県「御柱祭」

長野県諏訪地方では、6年毎に御柱祭が行なわれます。この祭りの主な行事はまず、御柱の伐採です。急な坂を使って、重さ何トンもある樅の巨木が「木落とし」される場面は有名です。山出し祭と呼ばれています。次いで、里曳き祭では、長持、花笠踊などの行列の後に、御柱が立てられて、フィナーレとなります。山出し祭は4月上旬に、里曳き祭は5月上旬に行なわれます。

この御柱祭は、約1200年前から行なわれているそうですが、ならば、およそ8世紀頃に始まった民間の慣わしで、この習俗の発生した時代は、『古事記』や『日本書紀』が生まれた時代と一致しているということになります。

私は、この祭りが、『古事記』にある「天の御柱」と何らかの関係があるのではないかと考えています。原始的な神話から発展、変化して、次第に現在のように形成された民間の風俗なのではないでしょうか。この祭りで用いられる「御柱」は、『古事記』に記された「天の御柱」をシンボル化したものだと考えています。



長野県「御柱祭」(講演者撮影)

中国苗族の起源神話

中国の神話に目を向けてみると、興味は更にそそられます。以下は、『盤王書』^⑧に記された中国の少数民族の一つ苗族の神話です。

天降大雨，天下没有民人。唯有伏羲女娲兄妹二人。伏羲欲与女娲为夫妇而女娲以为兄妹不当成婚，然伏羲苦求，拒绝不得。于是心生一计；我追你跑，若能赶上，则成夫妇。言毕，女娲则绕大树旋转。伏羲在后追赶，终未能及。于是伏羲也生一计；反转相巡，与女娲相迎。女娲入伏羲怀抱，终成夫妇。子孙连绵而为始祖。

(天は大雨を降らし、人は誰も居なくなって、伏羲と女娲の兄妹二人だけになってしまいました。伏羲は女娲と夫婦になることを望みますが、女娲は兄妹であることを理由に承知しません。しかし、伏羲の求めをた

だ断ることもできずに困りました。そこで一案を講じて、こう提案しました。「もし、私に追いつくことができたなら、結婚しましょう。」そして、大きな木の周りを走り出しました。伏羲は女媧を追いかけましたが、なかなか追いつくことができません。そこで、伏羲も一案を講じて、逆の方向に走り出し、前から捕まえました。女媧は伏羲の胸に抱えられ、二人は夫婦となって、子どもを生み、苗一族を作っていました。)

ここには苗族の起源が記されています。彝族^⑨や瑶族の神話にも民族の起源を語った話がありますが、その粗筋は苗族のものと全く同じです。この神話は、先述の女媧に関する神話のもう一つの系統で、ここでは女媧は泥から人を創った一人神ではありません。女性なのです。

これらの神話を見ても、男の神と女の神は結婚に際して、「大きな木」を廻っています。ここに登場する「大きな木」もやはり、結婚の唯一の道具です。

中国苗族「採花山」

中国の民間風俗にも日本の「御柱祭」同様、神話の痕跡がまだ幾つか残っています。1994年2月、私は中国雲南省の苗族の村を訪ねました。苗族は、春節に「採花山」、花山登りという祭りを行ないます。

「花山」は、20メートル以上もある杉の木の皮を剥いだもので、祭りが行なわれる広場の中央に立てられます。祭りの主な行事はまず、何人かの若者が、その高い杉の木に登ることから始まります。そして、苗族の伝統楽器、笙が鳴り響くと、若い男女はその杉の木、つまり「花山」を廻りながら、「笙の舞」を舞います。何回か廻ると、今度はペアになって踊り、同時に互いに歌を歌い合います。「対歌」と呼ばれます。村中の人々が「花山」を囲んで歓声を上げ、賑やかに盛り上げます。

祭りは苗族の若者たちの恋愛の場ともなっているわけで、この伝統的な祭りの中心的存在の杉の木、つまり「花山」が、伏羲や女媧の神話に登場する「大きな木」から変化したものに間違いはないでしょう。



中国苗族「採花山」(講演者撮影)

実物形態の符号化

苗族神話の「大きな木」や採花山の「杉の木」「花山」も、『古事記』や『日本書紀』の「天の御柱」「国の柱」、長野県御柱祭の「樅の木」「御柱」と同じ唯一の道具です。では、神話に描かれ、民俗的な祭りに使われる「木」や「柱」などは、いったいどのような意味を持っているのでしょうか。

私は、人類の神話は象徴、つまり、シンボルの蓄積であると思っています。シンボルは実物の形態を符号化したものです。逆に、その符号は実物の形態を象徴、代表したものです。日本の、『古事記』に描かれた「天の御柱」や『日本書紀』に記された「国の柱」^⑩も、中国の、伏羲と女媧の神話に登場する「大きな木」なども、いずれも一種のシンボルであると考えられます。中西先生がご指摘のように、これらは「生命の木」で、しかもそれは世界的普遍性を持ったシンボルだということができるでしょう。

更に一步進めて、それが象徴するものの意味や意義を考察してみますと、この「生命の木」、つまり「天の御柱」や「大きな木」などは、実際には性のシンボルで、それは男性の生殖器の実物形態を符号化したものであると思われる。

生命の創造について、人類の認識には、それなりの発展の過程があったことはいうまでもありません。原始の、最も古い時代、人類は自身の生殖能力が女性にあると考えていました。その時代の神話では、人類は一人の身体から分裂、或いは、その身体が小さく分かれて形成されたものであるように表現されています。様々な神話の中でも、「一人神の神話」と呼ぶことができるでしょう。「一人神の神話」では、世界のありとあらゆる万物は、女性の「分娩」「出産」のように、一人の神の身体の分裂から創られています。最も原始的な神話でしょう。例えば、中国には盤古という神の話があり、ギリシャにはプロメテウスという神の話があり、エジプトにはラーという神の話があります。日本の記紀神話にも、迦具土の神の話や、イザナギの禊ぎ払いの話や、大気都比売の話など三つほどあります。創世という形を取っていますが、

いずれも一人の神の、神自身の活動、或いは、神自身の身体の分裂という方法で、男女の交わりというプロセスはありません。

しかし、人類の文明が進歩するにつれ、男性との関係を経ず、女性だけで子どもを産むことは不可能であることが分かってきます。そして、新しい命を創造する根本は男性だと考えるようになっていきました。

「種」の起源の象徴化

紀元前5世紀頃、ギリシャの哲学者アナクサゴラスは、万物の根源はスペルマタである、つまり、「種」であるという学説を立てます。この学説では、人は男性の「種」によって創造されるものであって、女性はその創造の場所を提供するだけに過ぎないとしています。

無性の一人神の神話の時代から、男性の「種」の時代へと人類の認識が移り変わると、男性の「ペニス」は「人」を創造する権威として、シンボル化されるようになっていきます。それは、すべてを創造するもの、生命の起源としての象徴となってゆくのです。

こうした意義を踏まえながら、神話に描かれた「天の御柱」「国の柱」や「大きな木」、また、民間の風俗に用いられる「木」や「花山」などを見てみると、ここにも、そのようなシンボルの存在を確認することができます。それは、男性の生殖器への崇拝という形で表現されていますが、本質的には「生命はここから始まる」という深層認識の表れだと思うのです。



古代フェニキア「石柱」と「陶祖」

写真は、国際日本文化研究センターの安田喜憲教授がシリアで撮られたものですが、古代フェニキアの飾り物で、「石柱」と呼ばれるものです。石とカオリンと陶土で作られた「柱」で、村の入り口に置かれています。考古学では「陶祖」といいます。「陶祖」とは人類の「親」という意味ですが、ご覧のように、「親」は明らかに男性の生殖器の形態をシンボル化したものです。これらの造形はヨーロッパやアジアにも多く見られます。

次は、今なお東京都京橋に残されている日本風の「親柱」です。この「親柱」も、古代フェニキアの「石柱」「陶祖」とたいへんよく似た形をしています。



京橋「親柱」(講演者撮影)

中国文化にもスペルマタ、つまり種学説に通じる心理的要素が挙げられます。例えば、「祖先」という漢字の「祖」は、「示（しめすへん）」に「且」と書きますが、「且」は男性の生殖器の象形文字です。

写真の第一列の文字は甲骨文字です。甲骨文字は亀の甲羅に彫られた文字で、漢字のルーツです。第二列の文字は金文、金石文に用いられた文字です。銅器などに彫られたこれらの文字は、漢字の発展史において二番目に古い文字です。甲骨文字と金文の文字はともに象形文字で、図案にも見える形は「親柱」や「石柱」、「陶祖」にやはりたいへんよく似ています。^⑪



このように、人類の文化史において、ペニス崇拜の意識に表れている生命観や美意識の心理的特徴には、普遍性があるといえるでしょう。

この特徴が私たちに示唆していることがあります。つまり、日本は確かに、アジアの最東部に位置し、しかも島国ですが、その文化観念は世界文明に属しているといえ、人類全体の文明から隔離された、単独に存在する「純粹体」、文化における「単体」「孤体」ではないということです。その生成は、世界文明の潮流と歩みを同じくしており、その文学や文化の中には、やはり人類文明と共通の文化学的元素を備えているのであって、言い換えるなら、世界文明との接点を持っているのです。

5 文化学的意義C：異質の文化に対する融合力と変異

三点目は、「天の御柱を廻る」という第4元素と、「恋の歌」や「ヒルコ」の第5元素から知られる、日本民族の「異質の文化の材料を吸収し、融合することに対する絶大なる能力」についてです。まず、イザナギとイザナミの「柱を廻る」という結婚の儀式で、男の神と女の神がそれぞれどちらの「方向」に廻るかを考えます。

イザナギ・イザナミの「位置」と「廻る方向」

二神は、結婚の最初の手続きとして「柱を廻る」に際し、イザナギが左から右へ、イザナミが右から左へと廻ります。つまり、セックスを行なう前、生命創造の事前では、男の神の位置は左、女の神の位置は右です。

ここで、注意しなければならないのは、古代の左と右という概念が、現在、私たちがいう左と右と全く逆であることです。古代中国では、八卦を基に方向の確定を行ないました。東は左で、西は右です。今の京都市の区の配置は、八卦の地理的概念を継承しているわけで、左京区は京都市の東に、右京区は西にあります。この方向と方角の概念で、『古事記』にも記されているのです。

では、イザナギとイザナミの生命創造活動の開始に、このような「位置」はといったどのような意味を持っているのでしょうか。この疑問に答える前に、古代中国における漢族の創世神話、伏羲と女媧の神話についてお話したいと思います。

伏羲と女媧の「位置」と「廻る方向」

漢代の文献『風俗通義』^②に記された、伏羲と女媧の神話を見ても、最も根本的な内容は、男の神の伏羲と女の神の女媧が大地で夫婦となり、そして、人間を創るというものです。ここでは、伏羲と女媧は兄妹です。注意すべき点は、生命創造に及ぶ際の二人の「位置」、即ち「体位」だと思います。



伏羲・女媧（龍谷大学大谷コレクションパンフレットより）

伏羲と女媧については、同じく漢代の頃の絵が5点現存します。3点は石像画で、石の板に彫られた図案です。現在、河南省博物館に保存されています。その他の2点は帛画で、絹に描かれた図案です。現在、龍谷大学に保存されています。どの石像画も帛画も、その図案はたいへんよく似ています。

龍谷大学の帛画は、トルファンで発掘されたものです。1912年、第三次大谷探検隊メンバーの一人、吉川小一郎が西域探検でカラホージャ^⑬に古墳群があるのを発見しました。そこで、死者の棺の覆いに用いられていた、この帛画を発見しました。

これを見ると、東側、つまり、左は、蛇身人首の男の神、伏羲です。そして、西側、つまり、右に描かれているのは、同様の身体 of 女の神、女媧です。図案の上下には太陽と月、周りには星が描かれています。漢族の伏羲と女媧の神話の中で、生命創造に携わる二人の神の位置は、日本のイザナギとイザナミの二人のそれと全く同じです。

東アジアの、生命創造の神話に現れる男女二神の「位置」の設定は、漢族の祖先の、一種独特な、命に関する倫理観を表していると思われます。

古代中国の方位観念（1）

男女の交わりの「位置」の設定については、最も古いもので6世紀頃、『古事記』の書かれる200年ほど前の中国に、『洞玄子』^⑭という文献の記述があります。『洞玄子』の完全なテキストは、中国では既に散逸してありません。今、私たちは、日本の医学者丹波康頼によって10世紀頃に編纂された『医心方』^⑮という文献の中に収められているのを見る他ありません。現存する『医心方』の最古のテキストは、鎌倉時代の抄本で、1984年、国宝に指定されています。

以下、その『洞玄子』の、性の営みにおける男女の「位置」と、生命の創造における独特の観念に触れた部分を抜粋してみます。

凡初交會之時、（凡そ初めて交はり會ふ時には）

男坐女左、女坐男右。(男、女の左に坐し、女、男の右に坐す)
 男左転而女右廻。(男は左から廻り、女は右から廻るべし)
 男下衝女上接。(男は下へ突き、女は上を向いて受くべし)
 以此合会乃謂天平地成矣。(此の合会を以て乃ち天平地成と謂ふ)

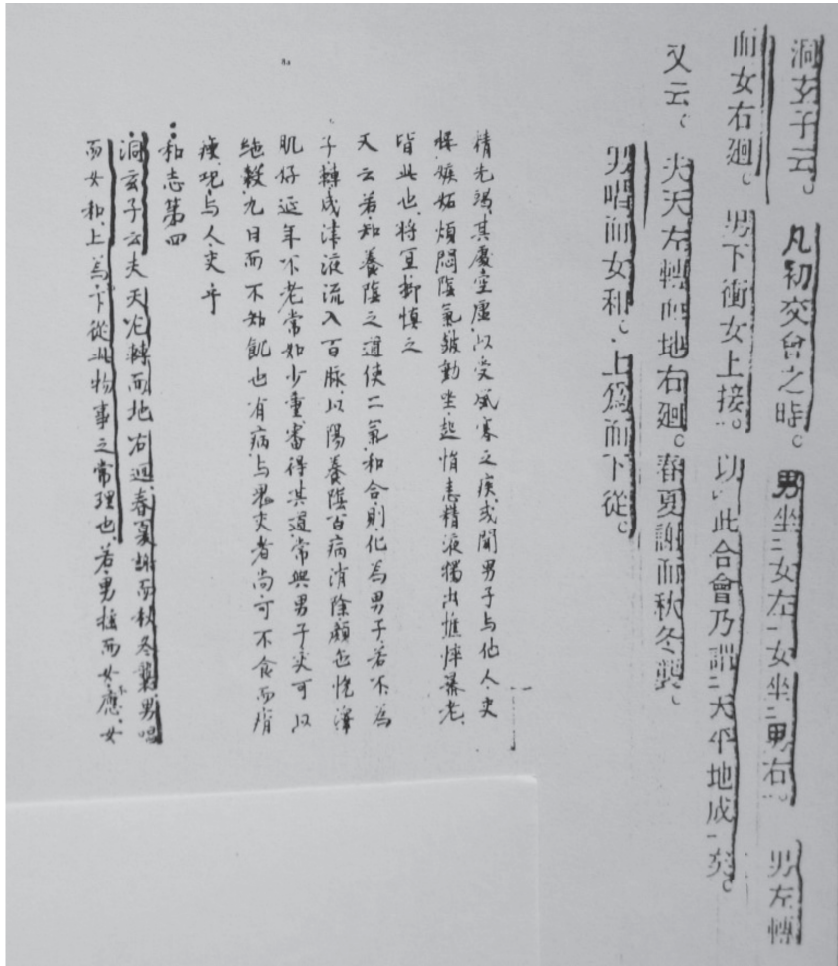
夫天左転而地右廻。(夫れ天は左に転り、地は右に廻る)
 春夏謝而秋冬襲。(春夏謝りて、秋冬襲ぐ)
 男唱而女和。(男唱えて、女和す)
 上為而下従。(上為して、下従う)
 此物事之常理也。(此物事の常理なり)

普会於二儀之理、(普く二儀の理に於て会ひ)
 俱合於五行之教。(俱に五行の教に於て合ふ)
 其導者則得保寿、(其に導ふ者は則ち寿を保つを得)
 其違者則陷危亡。(其に違ふ者は則ち危亡に陷つ)

「二儀の理」や「五行の教」は、中国思想史における重要な命題です。

漢族の祖先の世界観では、この世にある、ありとあらゆるものは皆、金、木、水、火、土の五種類のものからできていると考えられていました。これを「五行」といいます。これらの物質は基本的に、「陽」と「陰」の二つの性質に分類されます。それを「二儀」といいます。陽性のものは頑強で、陰性のものは柔和です。人類の活動は、「五行」と「二儀」の決まりに適って初めて、事が成就するとされました。中国思想史で「陰陽五行」と呼ばれる、古代漢族の世界観と生命観を構築する主要な学術の一つです。

では、これらの観念は、男女の交わりの「位置」や「体位」といったどのような関係があるのでしょうか。



『医心方』（講演者撮影）

古代中国の方位観念（2）

古代中国人は、北斗七星を中心とした天体の運動を「陰陽五行」によって解説し、方向を定めました。北は下で南は上、東が左で西が右です。八卦の方位もこのようにして定められました。八卦は、陰陽五行という学術の重要

な内容の一つです。

当時、中国人は、太陽は東から西へ、つまり、左から右へ動いていると考えていました。そして、沈んだ太陽は、夜のうちに地面の下を通過して、また東へと移動しているのだと考えていました。

こうした天体運動を基に、「天」は左から右へ動くという観念が生まれたと思われます。『洞玄子』にも「天左転而地右廻」とあります。そのように天体の活動がスムーズであれば、春の次には夏が、夏が過ぎれば秋と冬が来る、「東南西北」「左上右下」「春夏秋冬」、四季が自然に廻り、一年も順調、天下泰平だというわけです。これが、「普会於二儀之理、俱合於五行之教」の道理、原理なのです。

これらを考え合わせると、神話の中で、男の神が左から右へ廻るということは、「天」が東から西へ移動するという運動観念と一致し、また、女の神が右から左へ廻るということも、「地」が地下を通過して西から東へ移動するという運動観念と一致していることが分かります。

そして、男性とは、言うまでもなく「天」のことで、女性は「地」を表しています。「天」は「上」で、「地」は「下」、天体活動の原理から人間の男女の活動の原理までのこのような決まりを見れば、『洞玄子』が「男性中心主義」という立場を取っているのは明らかです。



古代中国の「五行」と「方位」

「ヒルコ」出生の意味

ここで、イザナギとイザナミの結婚式の一つのエピソードを振り返ってみましょう。「ヒルコ」のプロットです。

イザナギとイザナミは、大地に降り立つと「天の御柱」を立てました。そして、二人がこの「柱を廻って」最初に生まれたのが、失敗作ともいえる「ヒルコ」でした。なぜ、「ヒルコ」が生まれたのでしょうか。そして、この「ヒルコ」にはいったいどのような文化学的意味があるのでしょうか。

二人は失敗の原因を調査します。高天原の天つ神の教え「女先に言えるに因りて良からず」によって、もともと、女性が先に恋を語ったせいで誤りが発生したのだと、なるほど恋の歌には順序があるのだと知ります。そこで、高天原から帰ってくると、イザナギが先に、イザナミが後から言います。そうしてみたところ、今度は正常に日本の国土「大八島国」を分娩しました。

このエピソードは、たいへん重要な一つの観念を表しています。つまり、人間の本能が働く時、女性の愛欲が先に働けば、それは失敗をもたらすという観念です。逆に、男性の愛欲が女性に先んじて働き、女性がそれに付随する、或いは、呼応するという形を取れば、生命の創造は順調に行なわれるわけです。これは既に社会倫理学の範疇の内容で、厳格な倫理観、モラルの問題にも繋がっています。万物は男性が先導し、女性がそれに従うという法則に則って初めて正常に維持される、『古事記』にはこのような「男性中心の意志」「男性主導の権利」が巧妙に込められていることになります。

古代日本の倫理観（1）

しかしながら、このような観念は、「記紀神話」の基本的な倫理観やモラルとは一致していないと考えられます。

『古事記』では基本的に、「天照大神」を太陽神とし、また、日本の天皇の系譜における祖先、皇室の最高権威者とし、それと同時に、日本民族の起源の象徴としています。しかし、この太陽神は女神で、ギリシャ神話や中国神

話と異なります。ギリシャ神話に登場する太陽神「アポロ」も、中国神話に登場する太陽神——『楚辞』^⑩では「東君」と呼ばれていますが、「東君」も男の神です。日本神話が女神を民族の象徴、シンボルとしているのは、神話の形成期において女性の権力が社会生活の基盤の一つであったことを証明しています。

『三国志』『魏志倭人伝』は、日本の原始国家についての記録としては現存する最古の文献であるとともに、3世紀の日本を代表する国「邪馬台」の記録としても最も権威ある資料です。ここでは女性「卑弥呼」を最高位のリーダーとし、彼女は弟を補佐として政を行なったとされています。典型的な母系権力の構図です。

日本の天皇の系譜を見てみましょう。日本の歴史は507年、継体天皇の元年に正式に時代を綴り始めます^⑪。その後の歴史には女性の天皇が相次いで登場しています。

593—632年	推古天皇	治世36年間
642—645年	皇極天皇	治世4年間
655—661年	斉明天皇	治世7年間
686—698年	持統天皇	治世12年間
707—718年	元明天皇	治世11年間
718—723年	元正天皇	治世5年間
749—757年	孝謙天皇	治世8年間
764—770年	称徳天皇	治世6年間

以上、593年から770年の約178年間、推古天皇から称徳天皇まで、8人の女性の天皇が即位し、その間、重複を入れて、ちょうど50%に及ぶ89年間の政治が女性に任されていたことになります。この数字は、政治の最高権力が、男女同権という状況にあったことを示すものでしょう。これは、当時の日本社会の文化意識を考察するのに非常に重要な事実だと思います。

このように不断に、女性の天皇が現れる社会というのは、きっとそういった社会相応の倫理やモラルの原則を持っていたでしょう。少なくとも、女性は男性と平等な、同等の社会的権利を持っていたでしょう。それなのに、女性が先に愛の歌を歌ったからといって、どうして奇形児とも言うべき「ヒルコ」が生まれなければならなかったのでしょうか。

古代日本の倫理観（２）

８世紀末に編纂された『万葉集』には、男女の「情愛」に関する風俗的史料が少なくありません。例えば、巻第九1759「筑波嶺に登りて、嬬歌会を為る日に作る歌」がそれです。この歌は、当時の日本社会の、民間にあった風俗を生き生きと伝えています。また、当時の、男女関係における倫理的特徴をよく表しています。

鶯の住む 筑波の山の 裳羽服津の その津の上に 率ゐて
未通女 壮士の 行き集ひ かがふ 嬬歌に
人妻に 吾も交はらむ あが妻に 他も言問へ
この山を 領く神の 昔より 禁めぬ行事ぞ
今日のみは めぐしも な見そ 言も咎むな^⑧

この和歌は情熱に溢れ、生き生きした雰囲気満ちています。「人妻に 吾も交はらむ」「あが妻に 他も言問へ」は、今で言うなら乱婚ということになります。「交はらむ」とは、中国の唐代伝奇『遊仙窟』^⑨にもある「数回相接（数回相接す）」、何度も求め合うという意味です。また、「言問へ」とは、「愛を求めよ」という意味です。歌は激しいまでの愛情と情欲に満ちていて、民間における男女の愛の自由という倫理観念や心理形態をよく表しています。女性の愛に関する自由度もかなり高かったと思われます。

この他、私の手許には似通った材料がまだ幾つもありますが、以上のことを総合的に考察すれば、６世紀頃から８世紀頃にかけての日本社会には、女

性からの愛欲の働きかけという、恋愛における女性の能動性を否定する倫理観はなかったはずです。

したがって、『古事記』に置かれた「ヒルコ」のプロットや、このプロットが表している男性中心の厳格な倫理観とモラルの原則は、当時の日本の風俗や心理的特徴とは一致しないのです。それは、『古事記』に登場する「ヒルコ」が非日本的、言うならば、日本国籍ではない、まさに奇形児であったということを証明していることになるでしょう。

古代中国の倫理観

「ヒルコ」の出身を探るにはやはり、古代中国の倫理観念と社会的モラルについて考えなければなりません。

古代中国では、紀元前5世紀頃から、特に、孔子を中心とする儒家が形成されて以来、社会倫理の主な内容の一つとして、女性に圧迫が加えられるようになり、紀元前3世紀頃には、統一国家が形成されるとともに、「父権」が社会における重要なイデオロギーとなりました。『関尹子』^⑧という儒家の著作には「夫者唱、婦者随（夫は唱へ、妻は随ふ）」と明確に述べられています。これは、中国の封建社会における男女の関係の基本的な原則とされました。このような「男尊女卑」の観念が、先述の『洞玄子』に「男唱而女和。上為而下従。此物之常理也。」と著されているのです。

『古事記』に記された、天つ神の「女先に言へるに因りて良からず」には、まるで中国の「父権」制度のイデオロギーの声を聞くような気がします。彼らの言は『関尹子』のいう「夫唱婦随」そのものです。これは、注目に値する文化現象でしょう。つまり、『古事記』創作の背後に、非常に濃厚な「非日本文化」的コンテクストがあったことを如実に物語っています。

まとめ

文化学的角度から言えば、神話は人類の原始的な文化の観念、或いは、認

識の表現です。神話に表現されている内容は文化的価値と機能を備えていて、文化の土台を作っています。

イザナギとイザナミの日本創造の場面は精彩に富み、多元の要素を含んでいて、とても魅力的です。その背景には、神への信仰を基本とした哲学の本体があって、その哲学体系は生命と力への崇拝で構成された、この悠久の歴史を持つ民族の美意識の重要な観念でもあります。生命と力、つまり、森羅万象の、命あるものへの崇拝、力あるものへの崇拝が、大昔からの日本人の美意識の中核であったと考えられます。

一方、それと同時に、アジアの最東部、海に囲まれた地にあっても、この神話は、日本民族の文明の進化の行程が世界文明の発展と歩を同じくしていたということを証明しています。そして、その内容が複数の文化的源を有していることは、この民族が遥かなる古代から、異質の文化を吸収し融合する絶大な能力と、そして自ら変異する能力を持っていたということが明らかです。

神話というものは、その民族やその地域の哲学や文学、宗教や風俗などに大きな影響を与えているものです。また、こうした影響は、その民族の心理や意識の中に永く息づいていくものでしょう。その意味で、日本神話は永久、永遠の魅力を持っているということが出来ます。

以上、拙いながら、『古事記』のイザナギとイザナミの日本列島創造神話について、私の解説をお話いたしました。

ご指導を賜れば幸いです。

最後になりましたが、皆様方のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。そして、日中両国の互いの理解がますます深まりますように、両国の友好と平和が恒久でありますように、心から念じてやみません。

ご静聴、ありがとうございました。

訳注

- ① 北京大学中国語文学系教授、比較文学研究所所長。現職以外にも、香港大学現代語文科学院名誉教授、復旦大学日本研究所顧問教授を務める他、数多くの研究機関と学会で種々の役職をこなす中国学術界の重鎮。最初の来日は1974年。日本では、京都大学人文科学研究所、日本文化研究センター、国文学研究資料館において、研究活動を行なった。また、佛教大学文学部、宮城女子学院大学文学部で講義も担当した。1994年には、明仁天皇と日本文化研究について対話。詳細は、『厳紹鏞学術研究』（北京大学出版社 2010年）参照。
- ② 大阪出身の江戸時代中後期儒学者山片蟠桃（1748－1821年）にちなんで、大阪府が設けている国際文化賞。日本文化を海外に紹介し、国際理解を深めた著作、特に、日本文化の国際性、国際通用性に関する優秀な研究成果を上げた著作およびその著者に与えられる。昭和57年度第一回受賞者はドナルド・キーン氏。詳細は、大阪府「山片蟠桃賞」HP参照。URLは、以下の通り（担当部署：大阪府府民文化部都市魅力創造局文化課）。
- <http://www.pref.osaka.jp/bunka/news/bantou.html>（日本語）
- <http://www.pref.osaka.jp/en/attraction/culture/yamagata/index.html>（英語）
- <http://www.pref.osaka.jp/tc/attraction/culture/yamagata/index.html>（中国語）
- 山片蟠桃は大阪の豪商升屋の番頭を勤める傍ら、儒学、天文学、地理学、経済学他、多くの学問を修め、前近代という時代にあって驚くべき合理主義、卓抜した学説を立てた町人学者。地動説のみならず、太陽系は無数に存在するとし、地球以外にも生命体は存在するという大胆な宇宙論を展開、現代に通じる世界観、宇宙認識を世に広めた。大著『夢ノ代』全12巻（日本思想体系43 岩波書店 1973年版）がある。
- ③ 現堺市博物館館長。上代文学研究、特に『万葉集』研究の第一人者として知られている。奈良県立万葉文化館館長、池坊短期大学学長兼務。国際日本文化研究センター、京都市立芸術大学、大阪女子大学名誉教授。国内の多くの研究機関で教学、研究に当たった他、プリンストン大学やトロント大学でも客員教授を務めた。日本文学や日本文化、比較文学や比較文化の学術活動振興に尽力している。日本学士院賞、和辻哲郎文化賞、大仏次郎賞等受賞。2004年度文化功労者、2005年度瑞宝重光章受賞者。著書は百冊以上、『中西進著作集』（四季社 2007年刊）がある。
- ④ 厳紹鏞氏は、平成22年度第23回の受賞者。比較文学の領域における文化人

類学的研究、および日中間の文化文学交流関係史研究、また多年にわたる漢籍の流布に関する研究の成果が国内外で認められている。主な著書に、『日本の中国学家』、『中日古代文学関係史稿』（科学研究成果著作賞、全国比較文学図書賞）、『日本中国学史』、『漢籍在日本の流布研究』、『比較文学視野における日本文化』、『日蔵漢籍善本書録』（中国教育部人文科学研究賞）、『日本中国学史稿』、『比較文学与文化“変異体”研究』などがある（単著のみ列挙）。中国人研究者としては、平成8年度第15回、周一良氏に次いで二人目。アジアでは他に、大韓民国金思燁氏（昭和60年度第4回）一人が受賞している。本文は、平成23年2月10日、大阪歴史博物館講堂において行なわれた受賞記念講演の概要。

- ⑤ 氏の、文化・文学における多元性の研究、多様な史料に基づいた実証的分析は、文化的コンテクスト（コンテクスト）を基軸とした、文化の変異論および文学の発生学論として、概ね80年代に確立された。
- ⑥ 日本古典文学大系1『古事記 祝詞』53-57頁（倉野憲司・武田祐吉校注 岩波書店 1980年版）。
- ⑦ 『天降った神々』角川書店 1985年刊。
- ⑧ 中国で行なわれた民俗調査で発掘された文献。未刊。
- ⑨ 彝族も瑶族も苗族同様、中国の少数民族。ともに雲南省に多い。
- ⑩ 『日本書紀』には「国中の柱」「国の柱」「天柱」とある（日本古典文学大系67 坂本太郎・家永三郎ほか校注 岩波書店 1967年版 巻第一「神代」参照）。
- ⑪ 『漢字形義分析字典』（北京大学出版社 1999年）。
- ⑫ 後漢の学者応劭（153-196年）編纂。漢代は一般的に、前漢（紀元前202-8年）、後漢（25-220年）に分けられる。
- ⑬ 現在の新疆ウイグル自治区トルファン付近のアスターナ・カラホージャ古墳群には、漢族の支配者層が埋葬されていた。
- ⑭ 不老不死等「方術」に関する隋代の著作。
- ⑮ 従五位下鍼博士丹波康頼（912-995年）が、隋唐以前の中国の二百以上の文献を抄録、編纂し、984年に朝廷に献上した。現存する日本最古の医学書。全30巻。写真左は巻第二十八「和志第四」、引用は「至理第一」「和志第四」「臨御第五」。槇佐知子著『医心方』（筑摩書房 2004年）参照。
- ⑯ 中国戦国時代（紀元前403-221年頃）の楚周辺（揚子江中流域）の韻文を集めた詩集、歌謡集。中国最古の詩集の一つ。
- ⑰ 継体天皇（第26代天皇）を現皇室の初代とする戦後の新王朝論による。
- ⑱ 日本古典文学大系5『万葉集』（高木市之助・西尾実ほか校注 岩波書店

1966年版)。

- ①9 唐代小説。奈良時代に渡来、『万葉集』に大きな影響を与えた。上代以降の文学作品にも多くその内容、表現等が用いられている（『唐物語』『続浦島子伝記』等）。
- ②0 周代、秦の思想家と伝えられる尹子（尹喜）の思想は複数の文献に残存する。ここは、『莊子』記載の『関尹子』三極篇にある文言。